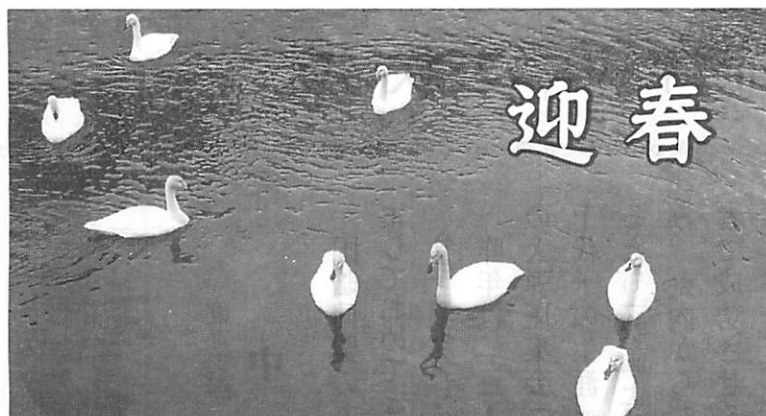




迎春

明けましておめでとうございます。
会員の皆さん、昨年の夏は「酷暑」といわれる異常気象で、青森県でも30度を超す日が50日も記録されました。そのなかでのご活動に敬意を表します。自民党の金権体質が一気に吹き出し、国民の批判にさらされていますが、岸田政権は閣議決定した「安保3文書」で、「戦争国家づくり」に突き進んでいます。大軍拡で、軍事産業は「ミサイル特需」で受注を急激に伸ばし、「殺傷兵器」輸出にも本格的に着手しています。また、基地や原発などの周辺住民を監視する「土地利用規制法」で600力所区域指定され監視される住民の数が格段に増え、プライバシーなど人権を踏みにじる土地利用規制法の廃止が求められます。岸田政権の「軍事優先国家」を目指す政治をくい止め、憲法9条が輝く政治を目指して今年も闘いを展開して行きましょう。治安維持法犠牲者の闘いと抵抗の歴史を受け継ぎ、「ふたたび戦争と暗黒政治を許さない」旗印をかかげて、今年も会員の皆さんと力を合わせ奮闘する決意です。



年頭のあいさつ
治安維持法同盟青森県本部
会長 館田篤廣



No. 594

編集発行人 田中幹夫
治安維持法犠牲者
国家賠償要求同盟
〒113-0034
東京都文京区湯島2-4-4
平和と労働センター全労連会館内
電話 03-5842-6461
FAX 03-5842-6462
振替 00110-6-97793
定価 50円

青森県版
2024年1月15日発行
第 379 号
〒030-0904
青森市茶屋町11番5号
TEL 017-718-3166
FAX 017-718-3167
青森県本部

明けまして
おめでとうございます

副会長 理事
事務局長 会計
事務局長 理事

監査
顧問

館田篤廣 平川弘彦 細川悦枝 中野次枝 荒谷徳行 一新谷弘志 内田信均 江刺孝夫 工藤孝夫 窪田恵成 鎌田哲子 沢目明子 色摩久美子 砂渡文夫 外崎文夫 松島政明 安藤治子 佐藤和子 野村美津男 高橋千鶴子 中嶋丘子 野村けい子 門倉さ昇 高杉と

新年のご挨拶



東青支部 事務局長

中野悦子

国賠同盟のみなさん、明けましておめでとうございます。今年もよろしく願います。

昨年は「三・一五、四・一六の大弾圧集会」として、伊藤千代子の生涯「わが青春つきるとも」映画上映運動にとりくみ、県内から二八〇名の来場者で成功させることができました。十一月には東北ブロック交流集會を青森で八年ぶりに開催し、八十名を越す参加。学習、交流は今後の活動を大いに刺激するものとなりました。自民党政治による構造腐敗がすすんでいる事が国民の前に

明らかになってきた今、国民の苦しみは正面から向き合う政治を引き寄せる取り組みをしていかなければ、この思いを強くしています。



弘前支部 支部長

平戸富治

終戦から七九年の二〇二四年

戦争を直接的に知っている人から戦争体験を聞くことは難しくなっている。しかし、先人たちが積み上げてきた膨大な語りは残されている。先の戦争の重みを受けとめ、いつのまにか語り継ぐ立場を自覚しないわけにはいかない。二〇二三年八月一五日付「赤旗」

山毛樺

◆縁は異なものとは良くいったもの。版画家棟方志功がまだ青森市の合浦公園でスケッチをしていた頃の草創期。

隣接する商業高校に通って志功の友達になったのが、川崎文雄。この文雄の兄が孤高の口語歌人として活躍した川崎むつをさん。川崎兄弟と志功は、すぐうちとけて親しくなっていた◆私が川崎むつをさんと知遇を得たのは、東京から帰郷した三十五歳の頃。五戸町の鳥谷部陽之助さんの紹介を経てのこと。以来川崎むつをさんが亡くなるまで、折に触れ私のことを気にかけていただいた◆石川啄木生誕百周年の節目の年、八戸の新聞に「石川啄木と八戸の人々」を連載し、八戸啄木会の設立を見たのも、川崎むつをさんの先行研究に導かれてのことだった。今年棟方志功生誕百二十一年。石川啄木生誕百三十八年。川崎むつをさんが九十九歳で逝去されて十九年目を迎える。

新年のご挨拶

で武田砂鉄さんが述べている。
『これからは、自分の近くに戦争を体験した人がいなくなっていく。自分の親族に広島・長崎・沖縄の出身はいない。原爆や地上戦を直接経験した人はいない。戦争を体験した人がいなくなり、語り継ぐのが難しくなってきた。……確かにそうだ。あの戦争を直接知らないけど、あの時どんなことがあったかを知ろうとする。この姿勢を捨ててはいけない。』
この姿勢を持ち続けたい。



下北支部 支部長

新 谷 徳 礼

新年が平和の年になるように願います

ロシアのウクライナ侵略は二年目を迎え、イスラエルのパレスチナのガザ地区の攻撃など日々心を痛めていることと思います。

国際社会は、国連憲章と国際法を守れの世論を広げていくことが求められています。

岸田政権は、敵基地攻撃能力保有、五年間で四十三兆円の大軍拡で戦争する国づくりへすすめようとしています。戦争か平和が問われるなか、日本は、力対力でなく憲法九条を生かし平和外交に力を尽くすべきではないでしょうか。いま自民党の安倍派を中心に「政治とカネ」が国民の怒りなっています。いまこそ自民政治を終らせ、国賠同盟のかける要求が実現できる新しい政治に変えましょう。



上十三支部

砂 渡 久美子
荒 尾 次 枝

明けましておめでとうございます。

一昨年のウクライナに続き昨年のガザ、気候変動による山火事・洪水・干ばつなど世界は終りなき混沌のなかにあります。日本は世界に向けて独自のメッセージを発信することなくアメリカに追随するだけです。国内に目を向ける

新年のご挨拶

と統一教会、パーティー券など政権の腐敗が渦巻いています。そして、アメリカ言いなりの軍備増強に邁進しています。

一九四五年を境に今に至るまで続いた平和。日本はこれを手放してはいけません。武器を持たない戦争が外交です。だから死にもの狂いで外交をしなければ戦争になります。私達は政権にこのことを諦めることなく言い続けなければならないと強く思います。



三八支部 支部長

内田 弘志

新年明けましておめでとうご

ざいます。年明けにあたり県内の同盟会員の皆さまに、一言お喜び申し上げます。

世界情勢は年始を迎えるたびにますます悪化の方向を辿ります。ロシアのウクライナ侵攻に、堰を切ったかのように、イスラエルのパレスチナガザ地区における一般市民を巻き込んだ大量虐殺、ミャンマー軍事政権の国民虐殺、南米ベネズエラの隣国ガイアナの領有権主張、中国の台湾問題、北朝鮮の国民人権無視の軍備肥大拡張と無差別のミサイル発射など、いまだこちらから発火して第三次世界大戦に発展してもおかしくない世界情勢にあります。

国内を見渡しても相変わらずリーダーシップの皆無な岸田文雄内閣の無能ぶり、各派閥を軸とした金権疑獄まみ

れの自民党政治の断末魔。法務大臣が派閥を離脱したからといってすむ問題ではありません。安倍晋三内閣によって改悪された法制度のもと、いつ国民が戦争に巻き込まれてもおかしくない、緊張状況にあります。私たち治安維持法犠牲者国家賠償要求同盟全会員を核とした、日本共産党を中心に革新民主勢力が結束して、奮起しなければならぬ時代状況にあります。

皆さまと共に結束しなければと、年頭に当たり心を引き締めているところです。





西北支部 支部長

外崎 文夫

今年の年賀状に全ては一期一会であると自分の決意を込めて書き送りました。

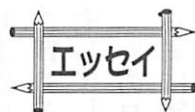
全て一期一会の世界に生きているのだ。だから一瞬一瞬かけがえのない世界であるのだという人生観が私の根底であるということでもあります。

この激動の時代に我々は何をなすべきか一堂に会して議論すべきではない

いだろうか。そんなことを考えています。

県内のいや東北のみなさんの英知を結集して、二〇二四年の大方針を決意しようではありませんか。

年頭に当たり愚考いたしております。



私が出会った子どもたち……⑥1

『葛西りま ③(最終)』

—二〇一六年八月二五日

「いじめで自殺した事件」を受けて—

一戸 義規

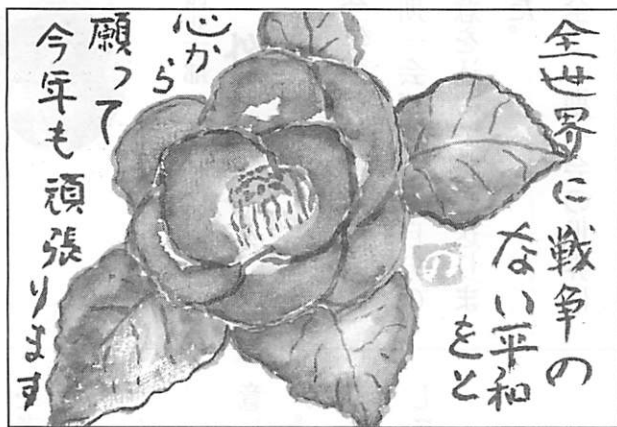
りまは二年生になりました。学校の配慮でりまをいじめていた中心の子どもたちは、りまとは別のクラスになりました。一年生の時の新採用教員が担任でしたが、二年では三〇歳代の経験のあるC教諭が学担任になり、りまは少し明るくなりました。

しかし、教師によって「悪者扱い」にされてしまった「いじめグループ・G」の生徒たちは、休み時間に廊下でりまに罵声を浴びせたり遊びのようにかかったりするなどの行動に出るようになりました。

他の生徒がたくさんいて教師も通る廊下で、周りに見えるようにりまを攻撃するという過激な手法です。この時、教師集団がりまをどう支え、「加害G」にどのような指導を試みたのかは、事件後の調査に当たった第三者委員会(二回目)の「報告書・II」にも記載されていません。教師集団が指導したのか否かもわかりません。

りまは、「G」のいじめに応じないなどの抵抗を続けましたが、心身の疲れがひどくなり、通学が困難になり、医師の診療を受ける回

絵 手 紙



野坂 峯子 (東青支部)

数が多くなります。そして「思春期うつ」の病名を付けられます。この「思春期うつ」という病名は、りまのいじめ自殺後に設置された第一回目の「調査委員会(一年で解散した)の「仮・報告書・I」で、自殺の「主なる要因」とされたものです。

いじめ「G」のいじめは、

集団性と陰湿性を深めていきます。りまが二年の五月、「G」は、りまの担任C教諭に「りまが化粧しているようだ。化粧落としと(綿)で確かめてほしい」と、嘘の情報を通して、担任を使つてのりまいじめを企みます。この学校では「化粧落としの綿でチェックすることが日常になつてい

るのでしょうか……C教諭は「G」の前でりまの頬を拭きます。りまは化粧していませんでしたが、「G」は笑いながら、遊びのようにな「りま化粧して先生にチェックされた……」と偽の情報をSNSで拡散します。りまは化粧落としを仕組んだのは「G」であることは知っていました。

この「学級担任を

巻き込んだ化粧落とし事件」で、味方になつてくれたはずの学級担任が、「G」の手先のように動いたことで、りまは絶望感を持ったのではないのでしょうか。

それでもりまは、時々休みながらも学校に通いました。夜の手踊りの練習にも参加し、ようやく一学期が終りました。

夏休みが終わり、二学期の始業式の日、学校に行きました。久しぶりに校長先生からも声をかけられ、りまは笑顔で応えました。しかし「G」からのいじめがまた再開しました。

：明日が「手踊りの全国大会」に出かける日でした。りまはいつものように団体手踊りの練習に参加し、帰宅しました。

次の日の八月二十五日、りまは学校を休みました。両親が仕事に、姉が高校に

出かけた後、りまは一人でJR北常盤駅に向かいました。

子どもたちは時に、笑いながら、遊びのように「仲間外れ」や「迫害」を繰り返します。しかしそれは、真面目に生きている人達や、正しいことを主張する政党名などを笑いながら排除し続けた日本の大人たちの生き方と重なっています。

(※私は、「りま・いじめ自殺事件の考察①」を書きました。

A4で9ページです。希望する方にさしあげます。もちろん、りまの父・葛西剛さんと内容を確認しています。

三月までには「考察②りまの自殺は防ぐことができた」を書く予定です。